

室町時代の将軍の庭園

はじめに 文化遺産部遺跡整備研究室では、庭園に関する調査研究をおこなっており、2011年度からの中期計画においては中世庭園の研究を進めている。2011年度は「鎌倉時代の庭園」、2012年度は「禅宗寺院と庭園」を研究テーマとし、研究会を開催した。そして、中世庭園の3年目となる2013年度は「室町時代の将軍の庭園」に取り組み、11月2日に『庭園の歴史に関する研究会』を開催した。

北山殿と東山殿の庭園 室町時代の将軍の庭園のうち、代表的なものには鹿苑寺（金閣）庭園と慈照寺（銀閣）庭園がある。これらはそれぞれ、第3代義満の北山殿、第7代義政の東山殿の庭園を継承しており、形を変えながらも現在に庭園として伝わっているものはこの2つのみである。

北山殿は、西園寺公経が営んだ北山殿を義満が譲り受けて造営した郊外の別荘である。応永5年（1398）に寝殿や舍利殿（後の金閣）などの建築が完成している。北御所・南御所・崇賢門院御所からなり、敷地は現在の境内よりも広大であった。寝殿や舍利殿が建てられたのが北御所であり、寝殿の西方には現在鏡湖池として残る大きな池がつくられた。南御所は義満の夫人日野康子の住居として使われた。北山殿は義満と康子の死後に建物の撤去や移築がおこなわれ荒廃したが、鹿苑寺となった。その後、江戸初期に修理がおこなわれている。

東山殿は、晩年の義政が適地を探した末に東山山麓の浄土寺の地に造営した山荘である。文明14年（1482）に着工し、翌年には書院などの一部が完成し、義政が移っている。その後、西指庵、東求堂、観音殿（現在の銀閣）が建てられた。庭園は文明19年（1487）頃からつくられた。庭園に必要な石や木が公家・武家・寺社から集められたことや、建築・庭園の空間構成は西芳寺を模倣したものとなっていることが知られている。義政の没後は慈照寺となったが、後に荒廃し、江戸初期に大きく改修を受けて復興した。

その他の将軍の庭園 その他の将軍邸の庭園については、主に参考文献に示した先行研究があり、概要は以下のとおりである。

初代尊氏は二条高倉邸、近衛東洞院邸、土御門高倉邸などを移ったが、邸宅としたとされる等持寺を描いた『等持寺絵図』には、敷地中央から東北部に観音殿と方丈に面する池泉庭園が描かれている。2代義詮が入居した三条坊門第は、かつては足利直義の邸であり、その頃には石組の園池、マツが植えられ亭が建てられた築山があった場所である。3代義満は崇高院御所と菊亭の地に室町殿を造営した。西側に寝殿、公卿座等の晴向き施設、東側に小御所、観音殿、泉殿会所等の奥向き施設があった。『さかゆく花』に記述があり、寝殿前には園池があり、鴨川から水を引き、規模は1町（約120m四方）に及ぶ広大なものであった。他に、滝、築山、松原があったことが知られる。4代義持が居住した三条坊門殿では邸内施設から「十境」が選定されている。また、義持の死後の建物配置が『建内記』に示されている。6代義教は三条坊門殿を継承し、庭園を改修している。また、義満の室町殿を改修して用いている。この室町殿の建築配置は義教の任内大臣大饗の折の指図に描かれている。三条坊門殿では寝殿の東奥に園池が配置され、周囲に会所などが建てられた。室町殿においても、園池の周囲に3棟の会所などが建てられた。8代義政は烏丸殿で京都・奈良の寺院から庭石・庭木を徴収し庭園を整備している。その後、室町殿に移り、烏丸殿から建物を移築した。会所と泉殿に園池があった。

なお、5代義量と7代義勝は在職期間が短く新邸を造営していない。また、9代義尚から15代義昭については、室町時代後期の戦国大名による争乱期であり、将軍が頻繁に変わっており、居住する場所が定まらなかったことなどから、従来、庭園の研究はあまり進められてこなかった。

研究会の開催 毎年開催している『庭園の歴史に関する研究会』は、庭園史について様々な分野の研究者によって多様な視点から幅広く検討することをひとつの目的としている。

2013年度の研究会は、最初に筆者が2011、2012年度の研究会において発表、議論された論点をまとめ、今回のテーマに関連する事項についての確認をおこなった。特に共通することとして注目されたのは眺望や環境の捉え方である。鎌倉時代には周辺環境を含めて全体を1つの景としてみる意識があったこと、また、禅の規範という

ものは突き詰めると明確ではないが境致という概念の影響は大きかったと考えられる。そして、それは室町時代の将軍の庭園にも継承されていることを考慮する必要がある。その他、建築と園池との位置関係は、地形等の制約を受けることもあるが、作庭の思想や儀式等の使い方を推測する上では重要である。

続いておこなわれた外部の4人の研究者からの発表の題目は次のとおりであった。鈴木久男(京都産業大学)「発掘された室町将軍の庭」、高橋康夫(花園大学)「室町時代の将軍御所と環境文化」、飛田範男(元長岡造形大学)「足利将軍9代から15代までの邸宅と庭園」、綿田稔(東京文化財研究所)「中心としての足利将軍邸—絵画史の立場から」。

鈴木氏の発表では、室町時代の将軍の庭園として代表的な室町殿・北山殿・東山殿の発掘成果について、独自の解釈も含めて報告された。室町殿の庭園はまだあまり検出されていないが、北山殿の舍利殿の北東に泉殿と推測される一連の遺構が出土し、大池の東岸に北御所寝殿が造営されたこと、東山殿では邸内北半部の実態がはっきりしていることが示された。

高橋氏の発表は、まず、将軍御所に配置された諸建築の構成・性格とその変遷についてであった。次に、義教の三条坊門殿と室町殿における池に面する会所、雑談と寄合の場となった壇所について報告がされた。さらに、中国・朝鮮・琉球との交流をふまえた室町の京都における環境文化、将軍御所における十境、山里の草庵風の庭園建築について見解が示された。

飛田氏からは、これまであまり検討されることのなかった9代以降のすべての将軍邸の庭園に関する発表がおこなわれた。9代義尚の小川殿と室町殿の庭園にはわずかな記録がある。庭園の詳細な描写がある上杉本『洛中洛外図屏風』の室町殿は12代義晴のものとしてされている。13代義輝は諸寺院に庭石や樹木を献上させて二条御所に池庭をつくった。15代義昭の二条城には、細川氏綱邸から藤戸石、慈照寺から九山八海石が運びこまれた。質疑では邸宅や建築の名称と植栽との関係について意見交換がおこなわれた。

綿田氏からは、雪舟や漢画師による作庭は事実でないという否定的な意見が出され、山口の大内政弘邸の障壁画が将軍邸を模倣していることなどが報告された。会所

における庭と建物、内部の座敷飾りと襖絵は一体であり、それらに共通基盤があったと考えられるが、それは何かということ、また、将軍邸の障壁画では武家文化の理想形が追求されており、庭園の場合にはそのようなことがどのようなかたちで現れているのかという課題が提示された。

総合討議では、各将軍邸の庭園の細部や、地方の武将の庭園に及ぼした影響について、検討を加えるとともに、各分野に共通する研究課題を確認することができた。

室町殿については、義教の時代に寝殿の東側に池があった可能性があること、水源は湧水の場合もあるが、園池が敷地の東側に配置されるのは水源を鴨川からの導水としていることが原因ではないかということについて議論がなされ、北山殿ではかつての水路が発見されたことが確認された。また、東山殿で出土した石組の導水路は上水であり建物の中に引いていると推測されることが確認された。

その他、寝殿と会所の空間の性格が異なることが、どのようにそれぞれの障壁画に反映されるかについては、特に寝殿についての資料が少ないために検討が難しいことが指摘された。

今後の予定 来年度の調査研究のテーマは「戦国時代の庭園」である。一乗谷朝倉氏遺跡、北畠氏館跡、朽木氏の旧秀隣寺の庭園は著名であり名勝に指定されている。また、江馬氏館跡、吉川元春館跡、大内氏館跡等では発掘で出土した庭園が修復整備されている。その他、近年では、八王子城跡、小田原城跡、岐阜城跡、大友氏館跡等でも園池遺構が発掘されている。

将軍邸のスタイルがどのように地方に伝播をしていったのかということは、昨年度までの研究会、また、今回の総合討議においても、度々参加者から疑問としてあげられたように、各分野共通の関心事項であり、また、将軍邸の本質を探るための重要な課題ともなっている。来年度は、上記した庭園等について、そのような課題をふまえて取り組むこととしたい。

(中島義晴)

参考文献

- 川上貢『日本中世住宅の研究』墨水書房、1967。
- 外山英策『室町時代庭園史』岩波書店、1934。
- 飛田範夫『庭園の中世史』吉川弘文館、2006。